

新 歌人群像

河野愛子

人間存在を
見つめて

黒木三千代



河野愛子の原点

河野愛子は大正十一年十月八日、父の任地、宇都宮市で生まれた。父はのちに旅団長まで務めた高級軍人で、父のめまぐるしい転任に従って小学校を五回も替っている。昭和十年、ミッションスクールの広島女学院に入学。在学中に国語教師のすすめで短歌結社「高嶺」に入会した。歌との出会いである。翌年、卒業と共に、旧満州（現・中国東北部）の任地にいた父母のもとに赴き、結婚して（夫もエリート軍人）昭和十八年に日本内地に還るまで三年足らずを満州で暮らした。ここで詳しく

く触れる余裕はないが、河野は沈黙して、満州時代を語らなかつた。この時代の歌は、ずっと後年、戦後四十年も経ってから初期歌篇「ほのかなる孤独」として、当時としての全歌集『河野愛子歌集』に収められた。因みに河野には単行歌集七冊と遺歌集一冊がある。

口元に手をやるたびに袖口の白きレエ
スがこころよかりき 「ほのかなる孤独」
青年の吸へる煙草が吾が頬にまつはり
てこそばゆき感じす 同
八月十七日参謀本部に夫をたづねひと
度は死にゆく君と思ひき 「木の間の道」



22歳の頃。旧満州東安省虎林（父の赴任先）にて母と

塗箸の乱れて浮ける桶みれば諍ひし今
朝にこだはらむとす 同

前の二首は満州時代、後の二首は敗戦後の歌である。この間の断層の大きさはどうだろう。連隊長令嬢として、娘らしい敏感な心の弾みや、異性に向ける仄かにセクシュアルな関心を生き生きとたたっていた人が、洗い桶につけたままの箸の乱れに、戦後の荒んだ生活感情を託してうたわねばならなくなった。三首目は、疎開先から上京して参謀本部に夫をたずねたが会えなくて、夫の自刃を一度は覚悟したのである。阿南陸相をはじめ軍人の

自刃が続いていた頃のことである。

療養の時代

昭和二十三年、肺結核が重篤になって国立療養所に入院する。このままでは三年位の命だと言われていて、手術も出来なかった。生き残れたのは、戦後入ってきたストレプトマイシンなど特効薬のおかげだろう。退院は二十九年。長い療養生活だった。この時代に愛唱すべき歌がたくさんつくられている。

ベッドの上にとときパラソルを
つつ癒ゆる日あれな唯一人の為め

【木の間の道】

髪のリボンが壁に映りて立上るあはれ
若き日も過ぎてゆくべし 同

ベッドに座ってパラソルを上げてみる。これをさして夫のもとに帰る日が来るだろうか。パラソルが外の世界への憧れを象徴して美しい。次の歌は壁に映っているリボンの影に注目したところに特長がある。何か物をつかまえて物に心を託すリアリズムの方法である。清潔なリリズムに溢れた歌は、出版当時読者の称賛を浴びた。河野は昭和二十一年に「アララギ」に入会して土屋文明の選を受け

ていた。アララギの新進、近藤芳美を中心に「未来」が二十六年に創刊されると病床から参加し、以来、「未来」が河野の終生の活動の場になった。

第二歌集『草の翳りに』にうたわれた時代、療養所を退院して自宅療養を続けている。そうしながら、次第に外出ができるようになった。ミッシェンズスクールに学び、療養所で内村鑑三の著作に感銘を受け、二十九年には無教会派の洗礼を受けていた。このころは頻りに同派の聖書研究会に出ている。高級軍人の家族として誇り高くあった戦前、戦中の自己意識がはずたずたになった敗戦、二十代で死を予期せねばならなかった結核体験、それにキリスト教への親炙などが相まって、河野の歌は次第に内省的、思索的になってゆく。療養所から戻ってみると、精神的に自立した関係を夫との間に結べていないのではないかという、疑問もむなしさも見えてくる。子がないことにも思いがゆく。あらわには言えないこともあったようだ。そうした「心」をうたうのに、身についたアララギ写生の方法では不十分で模索が始まり、昭和三十六、七年くらいから前衛短歌の暗喩や虚構の方法を試行するようになった。

河野愛子

秋山に泉はわけり夜は夜の光の輪より
かすかなる音

『草の驕りに』

弄ぶ風の中にて懸命にささげゐたりし
草の実の黒

同

青きもの籠にみたして帰りつづくかつ
ても後も妻の夕ぐれ

同

おのづから思ふあはれは曇る街人はさ
まざまの齢もて過ぐ

同

夜の泉を「光の輪」に見立てている。水明かりがあるのだろう。そこから水の湧くかすかな音が聞こえるという。山中の泉に夜行つたとも思えないから、これは内面の風景だろう。静かな精神活動とも思えばいい。こういう歌い方がこれまでにもなかったところである。次は弄ぶ、懸命に、ささげる、のようならララギでは嫌う擬人法や主観語を使って、実をつけて風に耐える草に普遍性を与えている。生き耐える存在すべてを思わせるような。三首目は「かつても後も」と、過去から未来に続く「妻」の系譜の中に自分を置いている。妻とはどういう存在なのかという思索がそこにある。次の歌は、街で行きあう様々な年齢の人々の背景に、人が生きるということの哀れをみている。河野はこの歌を自註した文章の中で「どこかで、人間男女のまぐわいの

てに生まれて来た人たちである」と書いていた。人間存在への根源的な問いを含んだ歌である。

人間存在の深みへ

男の死女の死そのつひの舌の凍ゆる闇
を思ひつめつも

『魚文光』

髪そしてちちのむなしさを知りながら
夏帽子目深く歩みゐるたりき

同

梳けばかく光まつはる髪にして厭離の
方になづさひにける

同

空あれば鳥ゆく声のかなしみを吾は知
りつつひしとあそびき

同

『魚文光』（ぎよもんこう）の時期、河野は大学聴講生として三年間平安女流文学と実存哲学を学んだ。男子学生らと現代思想の研究会を持ったともいう。死すべき存在としての人間、性に規定されてある人間のかなしみを見つけてやまなかった。そうせずにはいられない内的必然があった。舌は言語の為の器官、食物摂取に関係する器官、それに性愛の器官でもある。一首目の歌では男の、女の、と言っているから、性の器官として見ている。人間迷妄の闇は深く、それはエロスに濃厚に彩



昭和54年 ロンドンにて。姪の真理子と

られていて、と語っている。二、三首目は人は死すべき存在であるという認識が放つ嘆きの声である。髪も乳もやがては死んでむなしくなることを知りながら、人は今は今の営みに生きる。虚無をうち深く隠して。櫛をあてれば艶やかに光沢を増す黒髪であって、しかもそのままこの髪は死に向って漂いなじむものだ、とうたう。四首目は、空があるから鳥が飛ぶ、つまり余儀なくそうであらねばならない悲しみを知りながら、私は必死に愛をつむいだ、というのだろう。愛は性愛である。空があつて鳥が飛ばねばならないように、人があつて私は恋わねばならなかった。運命で



昭和59年 第八回現代短歌女流文学賞
パーティの時(右から二人目)

あす何^いか^ん起^こると知^しれず
手^てが^かた^まる
指^{ゆび}の^なま^まり
わが^{わが}形^{かたち}い^いや
夏^{なつ}子^こ

あつて、逃れることはできない。これらの歌には、性と死という河野の終生のテーマが結晶している。難しい歌だが、幾度も読み返すに足る、深みのある歌ばかりである。

一夜きみの髪をもて砂の上を引摺りゆくわれはやぶれたる水仙として 『鳥盾』

梨ひとつ腐るに月の差してゐぬおそろしくなりしもの形や 同
われには黒き柩のふさはし 前も後ろも落葉降りてあり 『黒羅』
おのれふと眼窩の縁に手を触れてその遂きにおどろきて己みにけり 『反花篇』
「老は女の地獄」とラ・ロシュユフコオ言ひにけり光景単純なる故にあらむ 『夜は流れる』
肉叢は死にはんなりとひつそりと水のくちびるを受けやしぬらむ 『光ある中に』
あとは駆足でゆかねばならない。一首目は情痴の極みというような歌だが、実際こういうことをしたというより、想念の中で男をひきずってゆくのだろう。裏切った男の髪をつかんでひきずる。やぶれた水仙とは、誇り高い女が誇りを傷つけられた傷心の姿である。梨が腐っている歌は、このように腐って崩れてゆくのは梨だけではないと思わせられる。ぶよぶよと崩れている形に、河野は自註によると、人を重ね合わせた。次は河野の美意識である。ふつうは白木をつかうはずだ。眼窩の歌はふと自分のどくろが思われて驚いたのである。自分の手が自分のどくろにさわるおののき。次はロシュユフコオの箴言に河野が解

釈を与えている。老が女の地獄なのは、光景が単純だから、と。あとは死ぬばかりと言うのなら男も同じだから、これは女の装飾や化粧や、それによってひきつける崇拜者のことだろう。老いてはそういうものはなくなる。最後の歌は絶詠と言ってもいい歌である。自分のからだが生んで死に水を受けているところ。それを見ているのは魂であろうか。わが唇に水の唇がはんなりと捺される。死に瀕して、河野はこんな艶やかに自分の死を想像した。エロス(性愛)とタナトス(死)をテーマとしてうたい続けてきた河野の最後をかざるにふさわしい歌である。この歌はがんセンター十階の病床でつくられ、身近な歌人によって筆記されたという。
平成元年八月九日、河野愛子は大腸癌のため、国立がんセンターで亡くなった。六十六歳だった。亡骸は、河野が、われにはふさわしとうたった黒い柩におさめられ、柩の蓋は決して開かれなかったという。誇り高く美しい人は、最後までそうであった。
最後の歌集『光ある中に』は、川口美根子の編集による遺歌集である。

〔くろき・みちよ「未来」〕